紀伊民報

2005年(平成17年)3月16日 水曜日 第18698号 (4)

# アユの生態に学ぶ

# 「自然の循環監視役」

## 研究者らが講演 第1回古座川シンポジウム

第1回古座川シンポジウム「アユの生態に学ぶ」(京都大学フィールド科学教育研究センター主催)が13日、古座川町中央公民館で開かれた。田中克センター長が「自然と人間が共存する生き方が求められている。アユの生態から自然とのつきあい方を学べれば」とあいさつ。アユ研究者ら5人が参加し「アユは自然の循環の監視役を果たす」「放流ではなく、天然そ上の回復こそがアユ資源保全の決め手」と述べた。

アユシンポジウムでアユの生態について話す講師ら
(13日、古座川町の中央公民館で)

講演したのは、内山りゅうさん(生物写真家)、井口恵一朗さん(水産総合研究センター中央水産研究所)、松浦秀俊さん(高知県内水面漁業センター)、高橋勇夫さん(たかはし河川生物調査事務所)、高橋芳明さん(和歌山県水産試験場内水面研究所)の5人。

### 漁獲高急減の原因

松浦秀俊さんは「高知県は長くアユ漁獲高が全国一だったが、2003年には全国11位になった」と話し、天然そ上の減少や冷水病のまん延、カワウや外来魚による食害、河川環境悪化を原因に挙げた。

高橋勇夫さんは、高知県の天然アユが激減したのは近年の海水温上昇が要因と指摘。1994年から海水温が急上昇し、96年の11月は過去20年で最高になった。ふ化時期のピークは、95年から遅れ始めたというデータを紹介。ふ化直後の稚魚は20度以上の高水温では生きられず、早く生まれた稚魚がたくさん死んだと考えると、ふ化時期のピークがずれた理由が分かる、と説明した。

高橋芳明さんも「田辺湾では12月の海水面温度が高いと海産稚アユ採捕量が少なくなることが分かってきた」と、海水温がアユに影響することを説明した。

### 天然そ上を重視

高橋勇夫さんは「80年代後半、放流が効果を上げたため、放流量を増やしさえすれば漁獲高が増えると考えた」とした上で、「放流と漁獲は関係がない。不漁の原因は天然そ上の減少。いかに天然そ上を多くさせるかだ」と話した。

その例として昨年、高知県で最も汚いアユ河川といわれる物部川に、数十年ぶりに300万匹の大量そ上があったことを紹介した。

また、「資源の保全方法を具体化することが大事」と述べ、漁獲高減少の原因を正確に見極めることの必要性を強調した。

井口恵一朗さんは、縄張りを持つことができるもの、縄張りをもてず、縄張りを持つアユのすきをついて群れで侵入し餌を得るもの、河口にいて争いを避ける―3つのタイプのアユの生き方を紹介。「このような多様な生き方を可能にする環境に整えるのが必要」と述べた。

内山りゅうさんは写真を撮ろうと古座川支流の小川に入り「これほど透明度の高い川が日本にあったのかと感動したが、ここ数年間でかなり汚れた」と指摘した。

高橋勇夫さんは、天然アユを守る理由として「アユは海から川、山の循環がうまくいってないといなくなる。自然の循環の監視役として、新しい自然とのつきあい方を学べる」と述べた。

シンポジウムには地元の人ら約80人が参加し、熱心に耳を傾けた。